

の歌唱は絶賛だが、演出にはブーイングの嵐。最終5日は、人気絶頂のテノール、カウフマン主演のヴェルディ「運命の力」。これを聴きにミュンヘンへ来たのだ。カウフマンは、流石に凄い。今日、この時のためにだけ歌うという気合いの入った絶唱で胸を打つ。眼の前で、これだけ歌われれば大満足である。9日間でベルリン・フィルとウィーン・フィルの年間二大行事に参加出来、「第九」にバレエと、オペラ・オペレッタが六つ。幸運に恵まれ、すべてが良い席、贅沢で充実したツアーだった。

イタリアのこころ (129)

## —ようこそ日本へ(4)— 復興への願い

和佳子インターナショナル 齋藤 和佳子

### ●慶長三陸地震と遣欧使節

イタリアから被災地石巻を訪問した一行は、「宮城県慶長使節船ミュージアム」に到着した。海に浮かぶ復元船サン・ファン・パウティスタ号は、東日本大震災の地震やこれに続く強風により外板が破損し、マストも折れて悲惨な姿であった。今から遡ること約400年前の1611年にも、三陸沖は大地震に見舞われ、大津波により仙台藩の数千人にも及ぶ命が奪われたと言われている。



写真上)左から、富山陽子先生(イタリア音楽を勉強する会代表)、フェデリコ・ファーヴァ氏(仙台日伊協会会員・在モデナ)、鈴木光太郎氏(前鹿島台録田記念館館長)

写真下)左から三野宮まさみ先生、小学校職員、鹿島台小学校校長先生からの感謝のお便りを手にしているアンナセレーナ先生(中央)と友人のご夫妻。

時の藩主伊達政宗は、復旧を進めながらも斬新なアイデアでサン・ファン・パウティスタ号を建造。わずか2年後の1613年に支倉常長らの「慶長遣欧使節」を派遣した。支倉らは1615年、イタリアのチビタベッキアからローマに上陸して教皇パウロ5世と謁見することができた。日本人初の欧州での外交交渉である。

このような説明を聞きながらイタリアからの一行は、「強靱な精神力を持つ伊達政宗と支倉常長は、被災者達にとっても郷土の誇りであり、困難に立ち向かう毎日にも大きな力と勇気を与えているのであろう。」と評し、復興を応援する気持ちは益々深まっていくのであった。

### 仙台日伊協会からの連絡

それから半年ほど経ったある日、そんなイタリアの人々の願いが現実のものと感じられる出来事があった。仙台日伊協会評議員の三野宮まさみ先生から、「震災からやっと一段落し、この度イタリアに行く事になりました。そこで、震災直後に絵を届けてくださったベルガモ郊外のラ・トラッチャ小学校を訪れて、子供達に直接お礼を申し上げたいのです。」と依頼を受けた。早速、現地のアンナセレーナ先生に連絡をとると、「お待ちしています。」とのことだった。

### イタリアからの速報

交流の当日を迎え、「果たしてスムーズに事が運んだらうか？」と案じる私に、アンナセレーナ先生から速報が届いた。「実に素晴らしい交流会でした！宮城からの皆様は、大震災直後に私達の学校の子供達が心を込めて絵を描いて届けた事をずっと心に留めておられました。そして遠路イタリアに足を運ばれて、鹿島台小学校の子供達の作品を届けてくださったのです。日本の方々の礼儀正しさに深い尊敬を覚えています。」ラ・トラッチャの子供達・先生や職員達は、震災により多くが失われた事を大変残念に思いながらも、悲しみの中で貴重な出会いをした事に感動でいっぱいとの事だった。正しく、平成の支倉常長達は日本とイタリアの心を結んだのである。

### 仙台からの手紙

一方、帰国した三野宮先生からも早々に次のような丁寧なメッセージが届いたのである。

(以下原文のまま)

### 「出 会 い」

あの日、2011年3月11日、今まで経験した事のない揺れに襲われ、すべての生活ラインも断たれ、不安でいっぱいだったある日、思いがけない電話が仙台日伊協会にあった。

名古屋日伊協会の齋藤和佳子先生から、イタリアの子供たちが被災した子供たちに励ましの絵を描いてくれたのでお届けしたい、とのお申し出だった。遠いイタリアで子供たちが描いてくれたその絵を見せて頂いたとき、感激で胸がいっぱいになった。